

§1. 結 言

..... 技術委員会委員長 関口春次郎

日本熔接協会・熔接棒部会は1956年春発願的改組を遂げ、熔接棒製造会社が会員となり、部会の運営、調査及び研究に要する経費を醸出することとなつた。そして運営会の下に業務委員会と技術委員会とが在り、有機的に連絡をとりつゝ、夫々熱意を以て活動を続けるに次第である。

私は旧熔接棒部会の部会長として数年間を経過したのであるが、部会の経済的事情などのため成果を十分に挙げ得なかつたことは遺憾であつた。然るに前記の大改組により部会の経済的基盤が確立し、新部会長浅田長平氏(株式会社神戸製鋼所社長)の下に一致協力し、着々と部会設立の目的が遂げられつつあることは、誠に御同慶の至りである。

会員会社の首脳者より成る運営会の依頼を受け、私は技術委員会
の委員長として、引続きこの部会に關係していることを、光榮に存
じている次第である。

技術委員会は、熔接棒の製造に關する技術及び學術の国内水準の
向上を期するのみでなく、熔接棒の適正な使用について絶えず検討
を続けている。そして必要に応じこれらを熔接工業界に公表し、又
日本熔接協会の組織をへて、政府機関の要望にも応え得るの態勢を
とつていたのである。

従つて当技術委員会に於いては、熔接棒製造会社の技術者及び研
究者の出席による研究報告及び討議のみでは甚だ不十分なのであつ
て、熔接棒を實用している熔接工業界各方面の諸会社は勿論、会社
官庁、大学及び研究所等の技術者及び研究者の参加を要望し、熔接
棒に關する科学及び技術の堂々たる進展を期することを信条とし、
これを励行している次第である。

改組後の第1年度に於ける技術委員会の活動は未だ充分の域には到
達していない。しかし次の六つの分科会を設けて研究及び討議を行
い、

- 第1分科会 モデル棒作製
- 第2分科会 アーク現象の研究
- 第3分科会 スラッグの諸性質の研究
- 第4分科会 作業性の定義及び判定法について
- 第5分科会 クラック・テストの研究
- 第6分科会 熔接棒規格に関する試験法の検討

又次の数個の副研究課題をとり挙げ、調査を続けて来た。

- A. 外国棒の調査
- B. 熔接棒の使用性
- C. I.S.O式規格案の検討
- D. 高張力鋼用熔接棒規格案の検討
- E. 特殊熔接棒

これらの研究及び調査は総てが完了したわけではない。しかし第1年度に於ける研究調査の経過及び成果を整理報告して置くことは、会員会社に対しては勿論、熔接工業界各方面に対し、有効な参考資料となるものと確信し、一括報告することとした次第である。

先にも述べた通り、ここに報告した内容は、熔接棒に関する基本的争項、会員会社に共通的な争項、及び熔接棒需要者側の留意すべき争項等に関連するものが多く、会員会社の高級にして秘密的な重要研究の内容を、取扱っている訳ではない。

この研究経過報告が会員会社の技術者及び研究者の作業又は研究上の参考となり、これらの内容が足場となって、各社の研究及び応用が飛躍進展することを念願している。又熔接棒需要者が、棒を適当に選択し、適正な用法を確立するにあたり、多少なりとも、参考となれば幸である。

一億の民が狭い国土で生活を維持し、益々発展するためには、産業の興隆特に工業の飛躍進展によって、その製品は自国民の用途を満して剩りあり、猶海外に輸出されて他民族に及び用いられることが必要であろう。これがためには製品は世界的に優秀で低廉なことが必要條件と信ずる。

諸般の工業に密接重大な関連を有する溶接工業の基本を成す溶接棒についても、この原則に従わねばならないと思う。本邦の溶接棒が漸く世界の水準に到達したかの感懐にひたつて、足踏み状態をつづけるようなことなく、我が溶接棒界は最善の工夫努力を傾けるべきである。

そこで基本的且共通的事項の研究及び調査の大部分は、溶接棒部会技術委員会に任せ、一層高級な研究及び応用は会員会社それぞれの立場で、優れた研究設備を完備し、十分な研究費を注いで独創的な研究を意図し、これを強力に押し進め、又速に研究成果を応用して、世界水準を遙に越えた優秀溶接棒が数多く而も低廉に生産されるに至るよう、努力されることを切望してやまない。

この意味に於いて溶接棒部会技術委員会各位が益々一致協力し、本邦産溶接棒の世界的発展への基礎を培われるよう、精励されることを切に念願するものである。

次年度は研究調査費が倍加しているのであって、関係者一同の一層の努力により成果が一段と飛躍するであろうことを期待している次第である。